

半世紀の歩みをふり返って

橋本昭夫

私は死ぬことなく、かえって生きて
主のみわざを語り告げよう。

詩篇 118:17

日本福音主義神学会（「神学会」）が50周年を迎える。それはなんとという驚きであろうか。「聖書のみ」の宗教改革の信仰を受け継ぎ、福音主義 (Evangelical) の神学を貫いてきた半世紀であった。その歴史の背後に主なる神の導きと「神学会」創立時の先達の先生方の熱い祈りがあったことを思わずにはおれない。宣教と牧会という教会の使命に仕える「実践的」神学研鑽の交わりとして「神学会」はその歴史を刻み得たのにたいし、その交わりに加えられた一人として、筆者は深い感謝を覚える。

いまその活動をふり返る。「神学会」は、東部、西部、さらに中部、九州支部として、それぞれの地域で密な連携を保ちながら活動を続けてきた。会は、宣教と神の民のむれの形成という教会の使命遂行のために確かな神学的洞察とその基礎に立って仕えようとして、それぞれの地区の神学校が核となり、そこで教鞭をとる教師たち、地区の教会指導者たちとともにさまざまな形の責任を担ってきた。「神学会」は、福音主義の旗印のもとに、教派的伝統は異なっても、相互の立場を尊重し、福音の真理の闡明化のために、共通の神学的認識を共有するとともに、相互に積極的な批判も交わしてきた。それぞれの地区での年に2度、あるいは1度の研究会議は、研鑽とともに信仰者としての交わりのときでもあった。

しかし「神学会」は、その本来の存在理由から、いわゆる学術的と言われることをその性格としてこなかった。「神学のための神学」という自己目的的な性格は、「神学会」の性格にそぐわないものであるからだ。そのため教職、信徒を問わず、教会に仕え、教会の使命をよりよく果たしていきたいと願う人々に広く開かれたユニークな学会であった。

そして、それをさらに特徴づけていたのは、主にある同労者としての人間味あふれる「お付き合い」であって、それもけっして小さいことではなかったということを付け加えねばならない。そんな歩みの中、特筆すべきは、1980年から3年ごとに開かれた「全国研究会議」であろう。開催準備の責任を主として「東部」と「西部」の持ち回りとし、のちに「中部」もそれに加わった。会場は、それぞれのところの神学校であったり、ときにはキャンプ場の場合であったり、公的な研修施設であったり、ということであった。また、昨今と違って時間的にゆっくりしていた初めのころは、研究会議の合間の、参加者相互の語らいもかけがえのないものであった。そのようにして交わりを全国規模に広げていくことができ、それを手掛かりに協力関係を広く築いていけたことも、「神学会」がもたらしてくれたものであった。

考えるに、全国研究会議が生み出したもっとも大きな成果は、神学誌『福音主義神学』であろう。この50周年の節目のとき、学会誌の『福音主義神学』も、ちょうどその50号を数える。そしていつのときからであったろうか、全国研究会議での発表論文がそこに収録されることになった。

「神学会」の半世紀、その活動が福音主義神学に立つ教会にどのような意味をもち、日本と言う国に宣教の使命の遂行にどのような広がりを与えたのかをふり返るとき、まずあげることができるのは、なんと言ってもその『福音主義神学』である。いまそのバックナンバーのタイトルを一覧するとき、この半世紀のそれぞれの時代、「神学会」がそのつどのチャレンジを受け、福音主義の立場からそれに取り組もうとしたことを跡付けることができる。『福音主義神学』は、「神学会」設立の年の1970年に第1号が刊行されている。初期の各号は、「神学会」設立の中心に関心に呼応して、聖書学および聖書学関連の論考が多くの割合(およそ2倍の分量)を示している。しかしそれと同時に、教義学、歴史神学、組織神学、実践神学の課題も幅広く取り上げられているのを知る。

そこに見る研究成果は多彩である。初期から数えると論文の数はどれほどに上り、どれほどの神学的蓄積となっているであろうか！そしてそれぞれの分野で、どのようなテーマが取り上げられているのかを追っていくとき、「神学会」が、聖書学的論究とともに、宣教・牧会の課題にどのように広く取り組んでいったかを跡付けることができる。そこにおけるテーマの方向を逐一あげることができないが、聖書学では旧新約それぞれの個別のテキストの理解をめぐるもの、聖書神学的主題をとりあげたもの、聖書研究の前提となる聖書関連言語・本文研究を扱ったものなどを見ることができる。歴史学では、初代教会の社会的事情および殉教と迫害を論じたもの、宗教改革期の教会と国家の関係を明らかにしようとしたもの、あるいは「神学会」に属する諸教会の伝統を紹介したものなどを見出す。組織神学部門では、そのつどの神学的潮流に福音的信仰がどう向かうかを考究したもの、義認論や聖化論また聖餐論、終末論など福音主義神学の中心的関心をめぐる観点の相互理解を求めようとするもの、また日本固有の文化と福音との接点・対立点を見極めようとするもの、さらには他宗教、他思想についての理解を深めようとするものなどである。また実践神学分野では、より具体的な主題がとりあげられてきた。伝統的思惟と宣教の関係、「釈義から説教へ」などに見る説教をめぐる考察、教会形成への取り組み、牧会的配慮の必要と可能性、また信仰に密接する霊性の涵養、礼拝、祈り、賛美なども中心的な分野として不断に論じられている。「女性教職」をめぐる議論も論議された。それに、おりおりの学会誌に説教が含まれているのは「神学会」ならではのことであろう。また言わずもがなであるが、「神学会」は、日本のキリスト教界一般が、その歴史と社会との対峙において直面してきた現代的課題にも向き合おうとしてきたのである。戦争責任問題などは福音主義に立つ教会にとっても無関係ではないとの認識からである。

概略ながらこのように「神学会」の多岐にわたる業績のあとをたどりながら、印象付けられるのは、熱意と犠牲を払いつつ、その活動を担ってこられた先達の先生方が、学問的に、そして敬虔において、いかに頼もしく豊かなお一人お一人であったかということである。そして「神学会」の層の厚さをいまこのようにふり返る。

「神学会」の半世紀、その歴史の礎は、とりわけ「第1世代」というべき先